

次の文章を読んで、後ろの問いに答えなさい。

私は知らなかったのだが、今では学校に電子辞書を持っていてもいいのだそうですね。つまり英語の授業なんかで、堂々と使えるわけである。

「今の学生は楽でいいよなー」というのが、その時一緒にいた編集者との一致した意見だ。

それは単に持ち運びがしやすい、という理由からではない。使っている人ならわかりだろうが、電子辞書はとにかく調べやすい。たとえば dictionary という単語の意味を調べるのに、全部を入力する必要はない。アルファベットを一文字打ち込むごとに候補が絞られていくから、dictionary あたりまで入力すれば、目的の単語に辿り着ける。分厚い英和辞典をめぐっては、細かい文字と睨めっこしていた人種としては、本当にうらやましい。単語カードを作るのだって屁のカッパだ。いや、そもそも今はそんなものを作る必要はないわけだな。

そんなふうにしていたら、もつとすごい電子辞書が発売されると知った。なんと、文字を入力する必要さえないというのだ。

それは太いペンみたいな恰好かっこうをしている。その先に極小の(注) スキャナーがついていて、それで目的の単語をなぞればいいのだそう。印刷物などの活字ならば、機械が勝手に読み取って、単語の意味を液晶ディスプレイに表示してくれるのだ。まさに魔法の辞書である。片手ですべてが済んでしまう。

しかし、と中年男としては考え込んでしまう。便利なのはわかるが、本当にそれでいいのか。

電卓が爆発的に普及し始めた頃、学校でこんな問題が起きた。小学生が算数の宿題を電卓を使って解くので、ちつともトレーニングにならない、というのだ。子供たちの中には、電卓をこっそり学校に持つてくる者もいるということだった。

私の印象だが、若い世代の計算能力が落ちていくように感じる。消費税を含めた値段を出すだけのことには、いちいち電卓を使う人を見ると、気のせいではないと確信してしまう。計算能力は子供の頃に鍛えないと身につかない。電卓が、彼等から鍛錬たんれんの機会を奪ってしまったせいだ、というのが私の推理である。便利すぎる電子辞書を見ると、同様の不安を覚える。なぜなら、本来の辞書で何かを調べるといふ行為には、鍛錬の意味も十二分に含まれているからだ。たとえば英単語の意味を調べる時、まずは一旦そのスペルを頭に入れてから辞書を広げる。途中で忘れたら、また見直す。覚え違いをしていたら目的のページに辿り着けないから、何度もスペルを確認することになる。そういつたことの繰り返しで、徐々に頭に入っていくものではないのか。同時に、英語に関わる脳細胞を鍛えることになるのではないのか。ペン型電子辞書でさつと文字をなぞって答えを得る、こんなことをして脳のどこが鍛えられるだろう。これは英語だけに過ぎらない。国語辞典や漢和辞典の場合でも、調べるという行為によって得られるものは、その言葉の意味や漢字だけに留まらないはずである。

携帯メールは手紙を書くことに比べて、脳の前頭葉を殆ど使わないそう。だから若者たちがハマるんだという。なぜなら前頭葉を使うことにはある程度の苦痛が伴うからだ。

誰だって難しいことを考えたくない。頭を使いたくない。しかし、だからといってそのニーズにこたえるだけでいいのだろうか。

(東野圭吾『さいえんす?』角川文庫より)

(注) スキャナー: コンピュータの入力装置の一つ。絵や写真などを画像として取り込んだりする。

問一、この文章の内容を百五十字程度で要約しなさい。

問二、傍線部で筆者が言っているような便利なもの(ただし、電子辞書、電卓、携帯電話は除きます)を一つあげ、それをどのように使うべきか、選んだ理由も含めて四百五十字程度で述べなさい。